

# 総合的な探究の時間におけるグローバルシティズンシップ育成に関する研究

## —評価の改善を中心に—

坊農 涼子（国際教育コース）

総合的な探究の時間は、教科横断的に各教科で習得した知識や技能を実践したり、自ら課題を見つけて考え、判断したりするなど、生徒の主体的な問題解決力を育てることが期待されている。しかし、教育課程の編成や指導計画は各学校にゆだねられているため、課題も多い。勤務校をはじめ、多くの学校では以下の三つが課題と考えられる。一つ目に、総合的な探究の時間を通してどのような力を付けさせたいのかという全体目標が明確に定まっていないこと、二つ目に、思考力・判断力・表現力を育成する探究の授業開発が道半ばであること、三つ目には総合の時間の評価方法と教師の関わり方が、議論されていないことが挙げられる。本研究では、グローバルシティズンシップ育成を目指した授業と評価の在り方について検討し、総合的な探究の時間のモデルカリキュラムや探究のプロセスと英語科の教科の特徴を組み合わせた授業実践及びその評価の方法を明らかにした。

### 1. 問題の所在と研究目的

これまでの「総合的な学習の時間」は、平成30年告示の新学習指導要領で高校において、「総合的な探究の時間」と名称を変え、より探究のプロセスを重視した学習が求められるようになった。さらに、小学校や中学校における実践を基盤としたうえで、自己の在り方生き方に照らし、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、自ら問いを見だし探究する力を育成する（文部科学省、2013）という目的も改めて確認する必要がある。

文部科学省によると、総合的な学習の時間は、どのような資質・能力を育成するのかということや、各教科・科目等との関連を明らかにするという点について未だに課題があると指摘されている。

勤務校の総合的な探究の時間は、高2・高3の二年間で「課題研究」という科目で設定されており（以下、勤務校の総合的な探究の時間を指すとき、「課題研究」と表す）、個人の設定したテーマに基づいた論文を提出する形式をとっている。「課題研究」を行うクラスは、文社系(CE)、理数系(SS、SSG)、国際系(GL)に分かれているため、その特徴も、コースによって異なっている。本研究では筆者が主にかかわっている国際系の「グローバルラーニングコース（以下、GLコース）」の取り組みについて検討を行うこととした。

「GL課題研究」（コースによって異なる取り組みを行っているため、区別するために、GLコース

で行う課題研究を「GL課題研究」と呼ぶこととする）の課題の一つは、高3で課題研究論文を書きだす前段階である、高2の「GL課題研究」の学習内容がしっかりと定まっていないことである。本来、高2は研究テーマを決定する大事な時期であるが、テーマ探しに苦戦する生徒が多く見受けられる。生徒は各教科・科目で学んだことを活かすことはあまりなく、「GL課題研究」が他の学習活動との関連がほとんどない状態で実施されている。

加えて、高2・高3を通した「GL課題研究」の客観性のある評価方法が存在しないことも問題である。これまで授業担当者の判断で、5段階の成績をつけてきたが、「GL課題研究」の成績は、他教科と同じ扱いにはできず、卒業に必要な単位として扱われてこなかった。生徒からみれば、卒業するためには課題研究論文に取り組む必要があるが、卒業に必要な評定には含まれないという矛盾が生じていることは否めない。そのため、一定の時間をかける論文執筆の過程が、軽視されがちになり、指導の難しさを生んでいるという一面があった。その原因は、前述したように、評価方法が確立されていないことが最も大きな問題であり、評価方法の開発は喫緊の課題となっている。

そこで、本稿では、高2の「GL課題研究」の年間指導計画の立案を行うとともに、とくに、英語科と連携した評価方法について、具体的な方法を明らかにすることを目的とする。

## 2. 「GL 課題研究」を軸にしたカリキュラム設計

### 2-1 グローバルシティズンシップと探究

GL コースでは、例年、海外から高校生を招き、校内で大規模な国際ディスカッションフォーラムを開催している。GL コースはこの行事を企画・運営するクラスである。そのため、必要な英語力を、日ごろの授業の取り組みを通して身に付けることができるように、授業内容を構成している。取り組みは、年々精査・高度化され、英語ディスカッション力の育成には一定の成果を上げている。

他方で、英語で課題研究論文を書く取り組みも行っているが、その指導には多くの課題があると考える。まず、生徒たちは、身の回りの課題を見つけ、主体的に学びを深めるということに慣れていない。さらに、各教科での学びが課題研究論文に活かされていることはほとんどない。田村学（2018）は、深い学びとは「各教科等で習得した『知識・技能』が構造化されたり、身体化されたりして高度化し、適正な態度や汎用的な能力となっていていつでもどこでも使いこなせるように動いている状態になっていること」と述べている。「GL 課題研究」はまさにこのような深い学びの実践の場であるはずが、実際には、各教科の学習内容と、課題研究論文との関連性を見いだせないまま、論文執筆という言語活動のみに重きを置いているという現状がある。

GL コースでは、国際的な視野を持った生徒を育成することを柱としているため、「GL 課題研究」のテーマに、貧困や環境問題などの国際的な社会問題を扱うことにしている。仮に、生徒が日本国内の貧困問題を取り上げたいときでも、海外では同様の現象はおきていないのかと、比較検討するなどのグローバルな視点を持たせるように指導している。森田真樹（2015）によると、グローバル教育は、経済、環境、文化、政治等の国境を超えた相互連関、グローバリゼーションによる諸課題等を学習し、他者の見方から生活を捉えなおすことができるスキルの育成を目指す教育であるとしている。また、「グローバル（地球的）」な視点に立って世界を捉え、考え、行動できる資質（グローバルシティズンシップ）を育成することが希求されているとも述べている。

グローバルシティズンシップが求める学習者像と、「GL 課題研究」の目的は、実社会や実生活と自己のかかわりから問いを見出し、自ら問いをたてるという点で、非常に重なる部分が多い。勤務校では、グローバルイシューと自己とのかかわりの中で、課題につながっていくような学びを目指している。予測できない社会で生きていく生徒にとって、「GL 課題研究」を通して世界をより良くするにはどう行動すべきか、どうあるべきかを問うことは重要である。GL コースでは、グローバルシティズンシップを中心に据え、自ら考え行動できる生徒を育成したいと考える。

### 2-2 新学習指導要領と総合的な探究の時間

「GL 課題研究」の課題は、前述したように、論文執筆を開始する前段階の、探究的な学習が不十分であることと、評価方法が存在しないことである。この2つを解決するために、まず、「GL 課題研究」で行う探究的な学びとはいったいどのようなものであるべきか検討する。

探究的な学習とは、図1のように、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動である。特に、体験したことや収集した情報を言語により分析したり、まとめたりすることは、思考力・判断力・表現力等の育成を図る上で大切である。言語活動を実施するにあたっては、各教科・科目等で行われている発表・討論・論述などの言語活動を充実させ、そこで培った力を探究活動において発揮させるべきである（文部科学省、2013）。

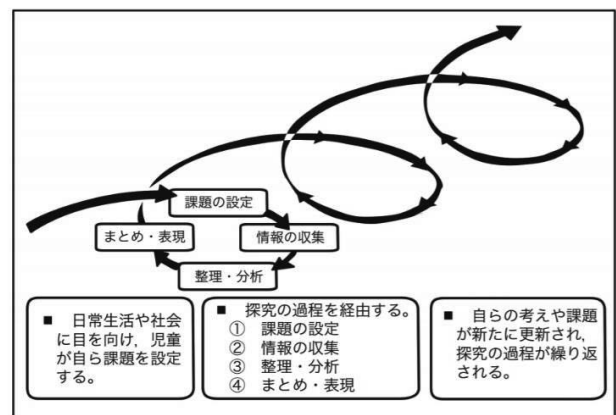


図1 探究的な学習における児童の学習の姿（文部科学省）

さらに、各教科・科目等で学んだ見方・考え方を活かし、総合的な探究の時間において活用する

ことで、身に付けた知識・技能が確かなものになる。一方で、総合的な探究の時間での学習活動が、各教科・科目等への学習活動への意欲を高めることができる。このような探究学習の特徴を生かし、教科横断的に学びを関連付けるための学習活動の工夫が必要である（同上）。

### 2-3 探究と各教科・科目の連関性について

総合的な探究の時間の改訂の趣旨を勤務校で実現するためには、問題解決的な活動が発展的に繰り返される探究的な学習とすること、他者と協同して課題を解決する協働的な学習とすることが重

要である。さらに、「GL 課題研究」の指導計画を考えると、教科の時間の役割について、以下2点を押さえておくことが必要であると考え。

- ①教科の学習を重視するとともに、思考力、判断力、表現力等を育む言語活動の充実を図る。
- ②各教科・科目等の関連を意識した学習活動を行い、総合的な探究の時間では、科目で学んだ知識・技能を活用する。

これらを踏まえると、勤務校の「GL 課題研究」は、図2のような形になることが望ましい。

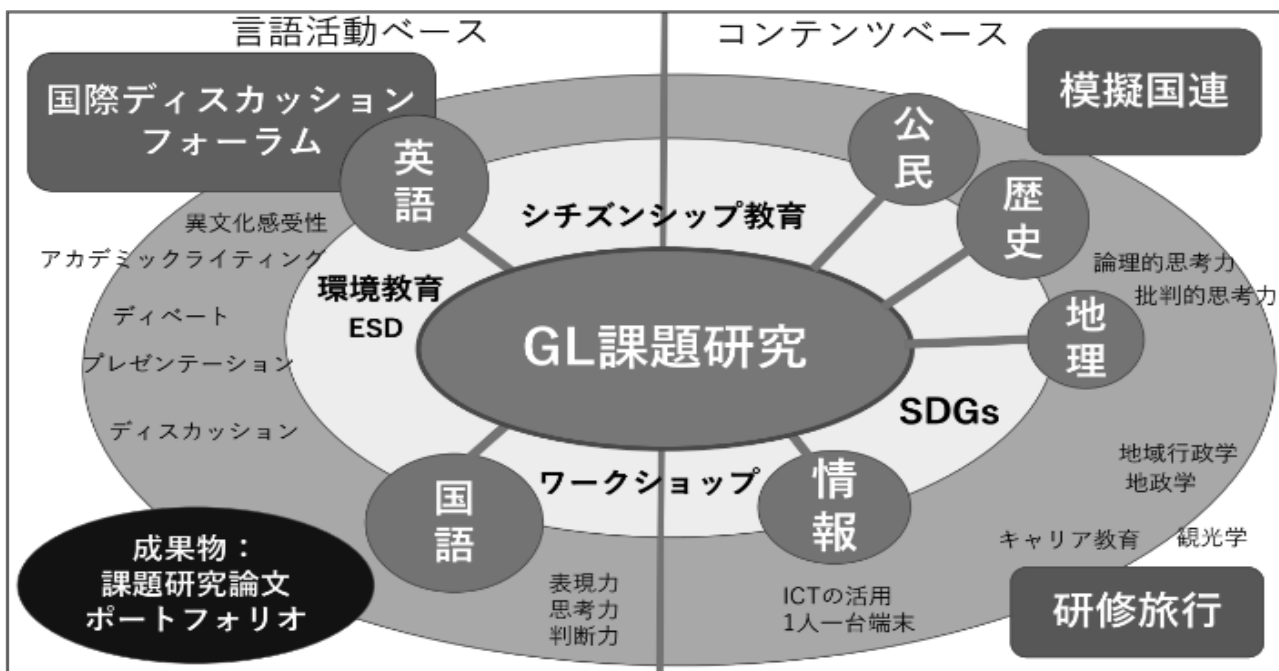


図2 「GL 課題研究」と各教科等の連関性（筆者作成）

図2のように、GL コースの学びは「GL 課題研究」を中心に各教科・科目が円を描くように配置されているのが理想である。円の外側には国際ディスカッションフォーラム・模擬国連・研修旅行などの行事が配置されている。向かって左側は言語活動を充実させることを主眼に置いた教育活動であると言える。GL コースでは、国際ディスカッションフォーラムに向けた英語運用能力を鍛える必要があるため、学校設定科目を置き、他コースよりもアウトプットの多い授業を目指している。また、現在、英語科と課題研究科と国語科を担当する教員が、論文指導をそれぞれ行っているが、今後共通のビジョンを持って、思考力・判断力・表現力を育成するカリキュラム開発をできれば、さらに高次の課題研究論文執筆につながるだろう。

向かって右側は社会科の科目である。英語で行う模擬国連や海外研修旅行は、これまで英語科が中心に行くことも多かったが、内容は、社会科に関わる部分が多いので、事前学習を社会科で行うなどの工夫も今後さらに進めていきたい。暗記中心の学びではない、社会科の見方・考え方を働かせるような実践を今後も期待したい。また、社会科の新指導要領にはSDGs（持続可能な開発目標）が含まれる。英語科でもコンテンツとしてSDGsを扱ってきたので、社会科と連携を図りながら、教科を超えたカリキュラムを考えていく必要がある。

情報化の授業では、GIGA構想によって一人一台端末が実現し、ICTの活用はますます進んでいく。生徒を取り巻く社会はデジタル前提社会であり、これまで以上に偽の情報を見抜くための批判的思

考力が必要とされる。コロナ禍で急速に進んだ若者の ICT 教育により、ユネスコはデジタル・シティズンシップ教育の必要性を指摘している。坂下絢子（2020）によると、情報モラルの学生アンケートでは、「アメリカのデジタル・シティズンシップ教育は自分で行動するスキルを獲得させるものであり、日本のような、大人が決めた情報リテラリーのルールを守らせることを目的にした授業では、当事者意識が育たないと感じる」という意見があった。情報リテラシーを育成すると同時に、ICT の世界でも現実と同様に、どのような市民性を育てるかを考える必要がある。

今後、教科を超えた連携を図るためには、各教科で探究のプロセスを確認・共有することが求められる。さらに、どこで何を教えているかを明らかにするべきである。前述したように SDGs といった複数の教科で扱う内容は、すでにどの分野をどの科目で教えたのかなどの生徒学習記録が、教科担当者に一目で分かるように可視化するシステムも必要である。

#### 2-4 学校設定科目の活用

高等学校において、学習指導要領に明記されている教科の他に、学校の特色に合わせて、独自の科目を設定することができる。石森広美（2013）によれば、「高等学校における独自科目の開発や設計は、格別に珍しいわけでもなくなっているが、その科目の所属する教科の目標に配慮しつつも、指針となるシラバスが存在しないため、カリキュラムデザインは学校の理念や方針、教育目標等を反映した形で検討されている」と述べている。つまり、学校設定科目の授業内容の開発は、担当者の裁量が大きく、独自教材を作る手間もある。しかし、それ以上に、「GL 課題研究」を下支えする授業を行う場を確保できることは意味がある。

GL コースでは「ディスカッションⅠ・Ⅱ」と「グローバル・イングリッシュ」という学校設定科目を置いている。「ディスカッションⅠ・Ⅱ」では国際ディスカッションフォーラムや、模擬国連の参加するための表現活動を主に行い、国際理解教育の一端を担っている。「グローバル・イングリッシュ」は、より内容に重きを置き、SDGs を扱った授業を開発するなどの工夫を行ってきた。本年度は、

より「GL 課題研究」の内容にむすびつけるように、アカデミックライティングの指導を中心に行った。

先述したように、「GL 課題研究」とグローバルシティズンシップ育成の目指すところが非常に近いので、両方を学べるような学校設定科目を行う必要があると考える。

### 3. 高2「GL 課題研究」の年間指導計画案

表1は、主に「GL 課題研究」の内容と、英語科の学校設定科目「グローバル・イングリッシュ」との連携の方法を意識して開発した年間指導計画案である。2章で述べたように、社会科や国語科や情報科との連携も重要であるが、2022年の新学習指導要領の開始に向けて、各教科がどのようなカリキュラムを考えているか、現時点では把握できないため、現在のシラバスからグローバルシティズンシップ育成の観点を取り入れる事が出来るような科目を、他教科の欄には記載した。

#### (1) 年間指導計画案の意図

勤務校の高3「GL 課題研究」では英語で論文を書く年間計画がほぼ出来上がっているが、高2の「GL 課題研究」はまだ開発が遅れており、論文執筆のための情報収集はさせているが、具体的な指導計画が完成していない。そのため、高2の「GL 課題研究」を、論文の準備だけではなく、探究的に課題設定をすることができる場にするために年間計画案を作成した。実際にこの年間指導計画を利用するのは2022年の新カリキュラム開始時になる予定である。

#### (2) 年間指導計画案の内容

高2の「GL 課題研究」のテーマは「シティズンシップを育てる探究学習」とした。課題は大きく3つに分けた。

1学期は「学び方を知る」として、主体的な学びとは何かを学ぶ。総合は、伝統的な暗記中心の学習方法とは全く新しい学び方であるということ、教師側から説明することが重要である。学習の主体、また自己の学習に自分で責任を持つという自覚が、主体的な学びを支えることになるからである。また、教師は知識を教え、生徒は学ぶという立場ではないことを、教師も理解し、ファシリテートすることに主眼を置かなければならない。生

徒にとっても教師にとっても、学ぶことに対する意識の改革のために重要な期間である。また、体験的に学ぶ場でもあるので、ワークショップを「GL課題研究」の中で行いたい。今年度は試験的に100人村のワークショップを導入した。実施後アンケートでは、ワークショップが「GL課題研究」に役

に立つと思うかという問いに100%近い生徒が肯定的に答えた。

2学期は「批判的思考力」を学ぶ。活動内容には外国人支援・障害者支援を取り入れた。周辺地域を知ることで、身の回りの課題を発見させるねらいがある。

表1 「GL課題研究」（高校2年生）の年間指導計画と他教科のカリキュラム（行事含む）

【テーマ】 『シティズンシップを育てる探究学習』		【課題】 グローバル 이슈についての英語探究論文を書く。		【目標】 他者と協働して問題を解決しようとする姿勢を養う。	
探究を通して社会の形成者としての自覚を持ち社会参画貢献しようとする。自己の在り方生き方を考えながら将来社会の理想を実現しようとする。		課題を深く掘り下げ、インタビューやアンケート調査・文献調査を基に、異なる多様な意見を受け入れ尊重しようとする。個性や特徴に向き合う。		探究を通して、自己を見つめ、どのように社会と関わりながら、よりよく生きることができるのか考える。	
月	学習課題	GL 課題研究 内容	他教科		行事
4月	課題の設定	①100人村のワークショップ ②ワークショップ振り返り	グローバル・イングリッシュ アカデミックライティング	ディスカッション 模擬国連のテーマ学習 現代文評論 平田オリザ「対の精神」 国語表現 「働く意義について」 世界史 地域文化形成「稲作の在り方」	模擬国連
5月	情報収集	①グローバルシティズンシップ ②探究とは何か ③データ収集方法・文献検索方法			
6月	整理分析	【グループプレゼン準備】 「地球的課題について」			
7月	まとめ発表	【グループプレゼン発表】 振り返りディスカッション 「伝わるプレゼンとは？」			
9月	課題の設定	①ピン君のワークショップ 在日外国人支援 「本当に必要な支援とは何か」 ②振り返り	グローバル・イングリッシュ アカデミックライティング	ディスカッション 国際フォーラムのテーマ学習 国際文化比較「地球規模問題」 難民・環境問題	文化祭・フードバンク共同企画 国際ディスカッションフォーラム
10月	情報収集	長岡京障害者雇用の取り組み講演 行政まちづくり 地域防災・福祉			
11月	整理分析	こども食堂ボランティア体験 ひとり親支援講演会			
11月	まとめ発表	調査・ディスカッション まちづくり動画作成			
11月	【まちづくり動画発表会】 質疑応答 優秀作品選出				
1月	課題の設定	①課題研究論文のための準備 ②個人テーマ設定	グローバル・イングリッシュ アカデミックライティング	ディスカッション 研修旅行事前学習 国語表現 「長岡京から未来へ」4千字論文 ディスカッション 研修旅行テーマ学習等	インドネシア研修旅行 校内模擬国連
2月	情報収集	①課題研究論文のための調査 ②個人テーマについて発表準備			
2月	整理分析	文献調査アンケート			
3月	まとめ発表	【プレゼンテーション発表】 課題研究テーマ・質疑応答			

3 学期は、研修旅行の事前準備があり、同時にいよいよ3年生から始まる課題研究の執筆に向けて、テーマ設定を始める。まず、日本語を使用して、考えをまとめ、研究要旨を書かせるようにする。生徒によっては、初めから英語で情報収集を行うほうが良い場合と、まずは母国語である日本語で、情報収集を行って考えを深めたほうが良い場合がある。どちらにするかは生徒自身に選ばせたいと思う。ただ、注意すべきことは、「GL 課題研究」は最終的に、英語で課題研究論文を執筆させるので、日本語で情報収集を行った生徒は、引用したい内容などをすべて英語に訳さなくてはならないという作業が生まれる。逆に、英語で文献を調べ、英語で考えをまとめている生徒は、日本語に訳すという手間が省け、スムーズに「GL 課題研究」に取り掛かることができるのである。しかし、そうするためには、もっと早い段階から、英語で探究的に学ぶための指導や、英語で文献を読む指導を強化しなければならないという課題がある。今後検討を進めなければならない。

### (3) 年間指導計画案に対する考察

「課題の設定」、「情報収集」、「整理分析」、「まとめ発表」という探究のプロセスを使った授業実践は、小学校や中学校の取り組みを通して行うべきである。年間指導計画案では GL コース高校2年生を対象に作成したが、小中高を通して、探究的な授業実践を行うことで、生徒が「GL 課題研究」に取り掛かる際に、すでに探究のプロセスを身に付けていることが望ましい。高校2年生で初めて探究のプロセスを経験するのでは、時間が足りない。また、現行のカリキュラムでは「GL 課題研究は」週1回授業の1単位しかないので、十分に実践を行うことができない状況にある。2022年度以降は授業を倍に増やして、探究のプロセスを習得できるような実践を多く行うべきである。

年間指導計画は他教科の学習内容を例として挙げたが、内容は不確かな部分がある。各教科担当者と連携して、作成し直す必要がある。特に、社会科は、学習指導要領に基づいた内容に対して、どこまでグローバルシティズンシップ育成を目的にした内容を入れることができるか検討の余地があるだろう。

ワークショップなどの体験的な学習活動を行おうと考えているので、今後は学外の研修等に参加し、教員のファシリテーションスキルを高める必要がある。

### 4. 「GL 課題研究」の評価をどうすべきか

より探究のプロセスを評価する「GL 課題研究」を実現するために、必要なのは評価の指標であると考え。これまで「GL 課題研究」の評価は、言語活動として優れているかを測ることはあったが、グローバルシティズンシップ育成の度合いを測る指標は使ってこなかった。しかし、探究のプロセスそのものを評価できなかったことが、これまで「GL 課題研究」を、他の教科と同様に、卒業に必要な単位として認めることができなかった原因であると考え。

そのため、先行研究として、石森広美（2013）が開発したグローバルシティズンシップ育成のための30の指標を、「GL 課題研究」とそれを支える各教科・科目の評価基準及び単元目標や、自己評価などに利用することができないかと考えた。

上記のような視点から、石森（2013）のグローバルシティズンシップ育成の指標項目を、授業実践に用いることができるように、整理したものが表2である。

例えば、「知識・理解」は各科目・教科の学習内容全体を通して、時間をかけて身に付けていくものであるため、シラバスに取り入れ、学習者と内容を共有する必要がある。また、授業案の単元目標に設定することで、グローバルシティズンシップの育成という目標を明確にした授業開発を目指すことができる。

「技術・スキル」は、「GL 課題研究」や各教科・科目の特徴を活かしながら育成することのできる項目である。

「姿勢・態度・価値観」は、学校全体の教育活動を通して涵養されるものであり、評価をする際は、自己評価アンケート等ではかるべきであると考え。年度の初めと終わりにアンケートを実施し、授業や行事を通して、生徒の意識の変容を確認する予定である。

表2 石森（2013）のグローバルシティズンシップの30の評価指標をどこで利用するか

知識 ・ 理解	課題研究の学習目標として設定する	【地球的課題 Global Issues】 ①人権・環境・平和・持続可能な開発等について基本的用語を理解している。 ②人権・環境・平和・持続可能な開発等について主要な問題を例示し、説明することができる。 ③グローバルな課題の複雑性を認識し、具体例を説明できる。 ④地球課題解決のための様々な取り組みや活動について知っている。	一学期
		【多様性・多文化社会 Diversity/Multicultural society】 ⑤人々との共通点・相違点に関心を払い、それらを見出すことができる。 ⑥地域、国、世界の多様性（文化・価値観・信条・アイデンティティ等）を認識している。 ⑦多文化社会の現状を把握し、多文化共生社会づくりのための課題を理解している。	二学期
		【グローバル社会・相互依存 Global connections/interdependence】 ⑧世界の国々の見えないつながりを意識し、グローバル社会の現状を例示できる。 ⑨多方面におけるグローバル化社会の功罪を述べるができる。 ⑩世界の問題を身近な事柄と結びつけて具体的に考えることができる。	三学期
技能 ・ スキル	各科目・教科の指導の評価基準にする。	【批判的思考力・問題解決 Critical thinking/Problem solving】 ⑪他者の意見に耳を傾け、それに対する自らの意見を整理・表現できる。 ⑫バイアスやステレオタイプを自覚し、冷静な判断ができる。 ⑬一つの事柄に対し、肯定側・否定側等多面的思考ができる。	ディスカッション・ ディベート 社会
		【コミュニケーション・協働 Communication/Collaboration】 ⑭自らの考えを（言語を含めた）様々な方法で表現することができる。 ⑮自らの学びや意見を効果的に伝達（プレゼンテーション）できる ⑯全体の中で自らの役割を認識し、他者と協力しながらタスクに取り組むこと ⑰異なる意見に遭遇しても自らの見解を再構築し、合意形成できる。	プレゼンテーシ ョン・合意形成 国語・英語
		【情報収集・活用 Information literacy/Collect or use information】 ⑱情報にアクセスし必要な情報を収集し、それを目的達成のために活用すること ⑲課題解決のために探究テーマやプロジェクトを設定し、自ら調査・分析できる ⑳メディアや与えられた情報を冷静に分析する目を持っている。	情報活用力 情報・図書室
姿勢 ・ 態度 ・ 価値観	学校全体の学習目標として設定する。	【自己理解・自己認識 Self-esteem/ Self-awareness】 ㉑自らの長所・短所を自己分析でき、良い点を伸ばそうとする。 ㉒自分自身を大切に思い、自分自身の生き方を探究している。 ㉓困っている人々の問題を自らの問題に置き換えて捉え、真剣に考えることができる。	自己評価で 到達を確 認する
		【異文化や多様性の尊重・寛容 Respect for Diversity/Cross-cultural tolerance】 ㉔考えや意見、タイプの異なる周囲の人とも協力しようと努力できる。 ㉕自らに心の壁を作らず、社会的状況、家庭環境、民族、宗教等が異なる人ともコミュニケーションできる。 ㉖オープンマインドを持ち、様々な違いを認め、肯定的に受け止めることができる。	
		【地球市民としての自覚と責任、行動への意欲 Taking informed and responsible action】 ㉗グローバルイシューを自覚し、ライフスタイルを見直す。 ㉘身近なプロジェクトや活動計画、話し合いに積極的に参加する。 ㉙プレゼンテーションや啓蒙活動などを行い、計画実行のために他者と協力して行動する。 ㉚よりよい未来をイメージし、それに対してすべきことを考え、実行できる。	

## 5. 「グローバル・イングリッシュ」の授業改善

### (1) 「アジアの栄養問題」単元指導計画の意図

本年度、授業実践をおこなったのが、文末に参考資料として掲げている探究型英語学習—アジアの栄養問題—単元指導計画である。この実践は将来的に、「GL 課題研究」の年間指導計画(表1)の、他教科の取り組みの箇所2学期と3学期の「グローバル・イングリッシュ」の授業に入れたと考えている。

教材開発にインドネシアを取り上げた理由は、GL コースは高校2年3学期の研修旅行でインドネシアを訪問するため、インドネシアの現状を理解することのできる教材を開発する必要があったからである。

もとにした資料は、Regional Report on Nutrition Security in ASEAN という、東南アジア諸国連合 (ASEAN)、ユニセフ (国連児童基金)、および世界保健機関 (WHO) の共同報告書である。主に、アジアの母親と子供の栄養問題を取り扱っている。授業ワークシートには、前掲の報告書の一部を Reading のタスクとしていれ、専門的な語彙を増やすことをねらいにした。

### (2) 単元の内容

インドネシアをはじめとする ASEAN 諸国では、急速な経済発展の裏側で、妊婦と子供たちの栄養

問題が置き去りにされてきた経緯がある。報告書は、東南アジアの子どもたちと母親の栄養状態に焦点を当てている。ASEAN の国々では、栄養過多と低栄養の同時危機、つまり過体重(overweight)の子どもたちがいる一方で、発育阻害(stunting)や消耗症(wasting)に苦しむ子どもたちもいるという「栄養不良の二重負荷」と呼ばれる状況がある。その原因となる背景は非常に複雑で、主に食糧問題・衛生問題・医療問題等多岐に渡る。特に発達阻害 (Stunting: 年齢に対して低身長) の母親がまた発達阻害の子どもを出産するという問題は、貧困のサイクルを生み出している。また、発達阻害の子どもは脳の発達の遅れが指摘されていて、学校の成績低下やより低賃金の職業に就く傾向があることもわかっている。ASEAN 諸国に残る児童婚などのジェンダー差別も、教育の欠如を産んでいる。このような複合的な問題や現象を、多角的・多面的に考察することがこの授業の最も探究的な部分である。

### (3) 英語を使って探究的に学ぶ視点

最終タスクでは、図3に示した栄養問題に関する構造図を用いて、生徒がおのおのプレゼンテーションを行い、問題のつながりや背景を説明させ、解決策を考えさせた。

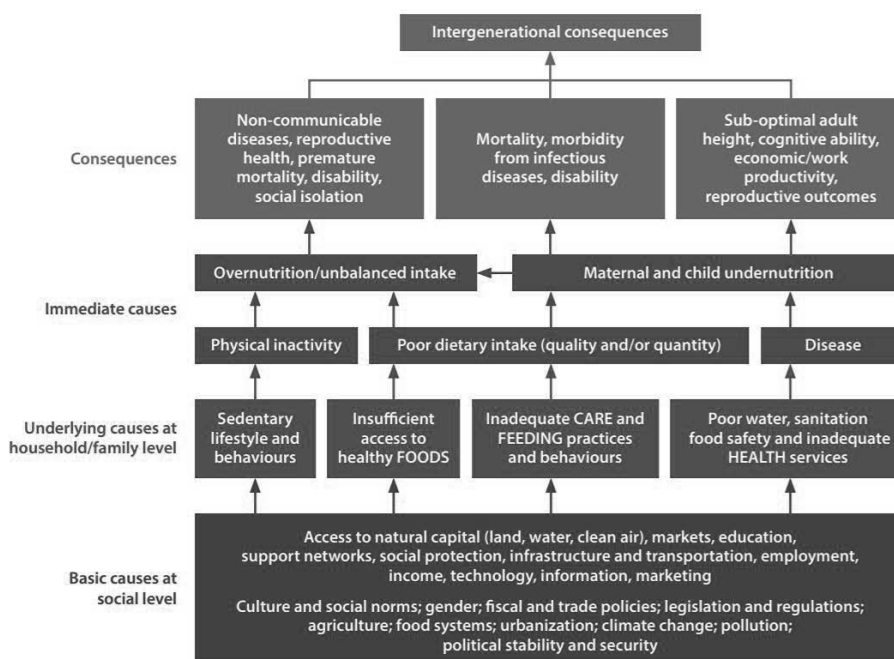


図3 栄養失調の概念的枠組み (EAPRO, 2016 『REGIONAL REPORT ON NUTRITION SECURITY IN ASEAN Volume 2』 p.12) より抜粋



まず、生徒は図3の「世代を超えた栄養問題」の問題の原因や背景を整理する。例えば、図の最下段には、衛生環境・教育問題・雇用問題、伝統的な文化や概念、食糧問題、気候変動などの社会問題であることが分かる。これらの問題の上に、家族の問題、生活習慣や、健康の問題がある。さらにそれらが具体的な生活習慣病や運動不足などにつながっていることが示されている。生徒たちはこの図から、社会問題が家庭の問題につながり、個人の病気や栄養失調につながり、結果、発達障害の問題をもたらしていることを理解することができた。プレゼンテーションでは「この表は、下の段から上に向かって、問題が細分化されている」と気が付いて、指摘するものもいた。さらに、それらのつながりを見て、「どこの部分に支援を行えば、発達障害の子どもを救うことができるのか」という視点から、日本のこども食堂のようなスタイルで、アジアの若い母親たちを集めた「お母さ

ん食堂」を作り、妊娠中の栄養や、食育について教育活動と栄養支援を行うというアイデアを発表したグループもあった。このアイデアは、高校生でもすぐにアクションを起こせるような具体的な内容で、共感する生徒も多くいた。また、アジアの問題と日本の問題を比較して、調べを進め、妊娠中の母子には「ヨウ素」の摂取が必要であるということを知った生徒は、さらに、日本が「ヨウ素」の栄養剤の生産量が多いことを知り、日本はアジアの母子をもっと支援することができるという趣旨のプレゼンテーションを行った。

#### （4）英語と探究を合わせた単元の評価基準

表3は、資料として載せている単元指導計画の評価基準の部分の抜粋である。英語の評価基準をみると、応用的な力を求めている内容であることが分かる。英語に興味があり、モチベーションが高いGLコースの生徒が、思考力・判断力・表現力を高めることができるように設定した。

表3 単元の評価基準（英語・探究）

#### ○ 単元の評価規準（英語）

コミュニケーションへの関心・意欲・態度 (A)	外国語表現の能力 (B)	外国語理解の能力 (C)	言語や文化についての知識・理解 (D)
相手に伝えよう、あるいは相手を理解しようとしている。	工夫して内容をパラフレーズし、正しくリテリングすることができる。	内容を理解し、英問英答の答えの根拠の文を探し出すことができる。	正しい語順や語法を用いて文章を構成する知識を身に付けている。

#### ○ グローバルシティズンシップの評価基準（探究）※（石森、2013）より引用

コミュニケーション・協働 (E)	情報収集・活用 (F)
全体の中で自らの役割を認識し、他者と協力しながらタスクに取り組むことができる (16)	メディアや与えられた情報を冷静に分析する目を持っている。(20)

また、グローバルシティズンシップの評価項目は、グローバル教育における30の評価指標（石森、前掲）を3つに分けたドメインのうちで、「技術・スキル」にある目標指標No.16の「全体の中で自らの役割を認識し、他者と協力しながらタスクに取り組むことができる(コミュニケーション・協働)」を利用することにした。最終課題のグループプレゼンテーションで、他者と関わりながらプレゼンの構成を考えていく過程で身に付けさせたいと考えたからである。また、No.20の「メディア

や与えられた情報を冷静に分析する目を持っている(情報収集・活用)」を育成することを目指した。題材を選ぶ際に、より真正な国際組織の報告書などを探し、数値やグラフなどが多く載っているものを採用した。生徒たちがプレゼンを作る際に、もっとも主張したいテーマに沿って、さらに情報を精査する必要があるように工夫した。上記のような「技術・スキル」は、将来生徒たちが実社会の場面で当たり前のように求められる力である。

さらに、単元全体を通して「知識・理解」の目

標 No. 3「グローバルな課題の複雑性を認識し、具体例を説明できる（地球的課題）」、No. 10「世界の問題を身近な問題と結びつけて具体的に考えることができる（グローバル社会・相互依存）」という2点を目指した（単元指導計画「本単元について」参照）。

### （5）ルーブリックを使った評価

評価については、単元指導計画に提示している、以下の口頭発表ルーブリックを使って評価を行うことを検討している。

表4は、石森（2015）を基に、国際理解に関する一連の学習の総括として、各自プロジェクトに

表4 口頭発表のルーブリック

5 素晴らしい	【探究】生徒は探究した課題について明確に述べ、その重要性について裏付けとなる理由を提示。提示された結論を指示する具体的な情報が示される。 【発表】発表方法は人を説得する力があり、発表の構成も論理的である。視覚的な補助資料などを効果的に使用し、聞き手を引き付ける。
4 とても良い	【探究】生徒は探究した課題とその重要性を述べる。提示された結論を指示する適切な量の情報が示される。 【発表】発表方法にも工夫が見られ、発表の構成も適切である。視覚的な補助資料を用いている。
3 良い	【探究】生徒は探究した課題とその重要性、結論を述べるが、それを支持する情報や論理性は、4、5ほど説得力のあるものではない。 【発表】発表方法や構成はほぼ適切である。視覚的な補助資料にも言及している。
2 努力を要する	【探究】生徒は探究した課題について述べるが、課題に応える結論は十分ではない。 【発表】発表内容や発表方法に対する工夫も不十分である。
1 不十分	【探究】生徒は設定した課題に対する探究を行わないまま、発表している 【発表】適切な結論が述べられず、発表内容も論点が不明瞭でわかりにくいものである。

### 石森（2015）を参考に筆者作成

取り組みせ、プレゼンテーションをさせることを想定して作られたルーブリックを、探究と発表のみを観点にしてまとめたものである。このルーブリックは事前に学習者にも提示し、どうすれば高い評価を受けることができるのか明らかにしておくことが望ましい。

学校設定科目「グローバル・イングリッシュ」において、グローバルシティズンシップ育成と探究を兼ね合わせた単元を作成する目的は、まずは教師主導でミニ「GL 課題研究」とも言えるプロジェクトを数多く行うことによって、探究的な学びのプロセスを例示するねらいがある。

## 6. 実践の結果

### (1) 生徒の感想

以下は個人プレゼンの中で生徒から上がった意見の日本語訳である。

- ・教育の普及と妊婦の健康観察が問題の解決になるだろう。貧困と栄養問題は世代を超えた（*intergenerational problem*）である。
- ・児童婚の問題は深刻で、*Stunting*（発達障害：年齢に対して低身長）の問題と深いかわりがある。
- ・肥満も貧困が原因で起こることを知った。

・急速な経済の発展が子供たちの栄養状態にも影響を与えている。母子の健康のために栄養についての教育が必要。

・最初の1000日の栄養状態が非常に重要。子宮中の栄養失調が将来の成人病のリスクも高める。

・胎児の体重の減少を防ぐためにヨウ素の摂取を勧めるべき。日本はヨウ素を最も多く生産している国の一つだ。

・未来の生活習慣病を防ぐために「最初の1000日」の栄養状態を改善することに投資するのは、いい考えだと思う。

プレゼンテーション発表には、生徒たちの様々な気づきがあった。着目すべきは、コミュニケーション英語の授業で習った、内容を違う語彙で、再度産出するというリテリング活動が定着していることである。さらに一部の生徒では解決策や新しい情報を付け加えて発表していた。ASEAN 諸国を中心に起きている栄養問題は複雑性があるが、生徒はそれらについて明確に述べ、意見を主張することができた。また意見の裏付けとなる理由を論理的に提示することができた。

### (2) 実践の振り返り

GL コースの学校設定科目「グローバル・イングリッシュ」では、探究のプロセスである、①課題の設定、②情報の収集、③整理分析、④まとめ・発表のうちの、①と②を教員が担い、③と④を生徒が担っている。つまり、探究の中で最も時間がかかり、個人によってそれぞれ異なるテーマ設定の部分を省くことで、授業内では整理分析・まとめ発表という全員が共通して行う部分に絞って授業で扱った。このようなプロジェクトを年間を通して複数のテーマで行うことで、探究のプロセスを経験する機会をつくりたい。また、学校設定科目で身に付けた「知識・技能」を活かしながら、「GL 課題研究」に取り組みせたい。

### (3) 「英語表現」科目の本来のねらい

「GL 課題研究」を英語で行うことに関わって、「英語表現」の科目をどう運用していくかも大きな課題を残している。湯川笑子(2020)によれば、全国的に見ても、小中学校までの英語表現活動の実践状況は高校よりもむしろ進んでいる。表現活動に対する素地があるにも関わらず、高校では旧態依然と表現活動は一切せず、「英語表現」の中身が文法解説と演習問題をやるだけで終わっているケースが非常に多い。勤務校は附属校である利点を生かし、英語での課題研究論文執筆を行ってきたが、必要となるアカデミックライティングのスキルを「英語表現」で養うことができているかと言えば、いまだ不十分である。そのような問題意識のもと、「英語表現」の科目の本来のねらいを達成すべく、考案したのがこの学校設定科目「グローバル・イングリッシュ」の実践である。

## 7. 生徒アンケート結果

これらの学校設定科目の実践と、「GL 課題研究」について高2、高3に対してアンケートを行った結果が以下である。

①「GL 課題研究」を通してどんなことを学んだかの質問では、英語アカデミックライティング(69.6%)、正解のない問いや社会問題に取り組む姿勢(65.2%)が上位だったが、一方で、探究学習を行うことで社会に貢献することができるかという意質問では全体の13%という低い数字が見られた。このことから、生徒たちには、学校で学

んでいることが、実社会に活かされる(つながっている)という実感はまだないことが分かる。

②「GL 課題研究」の難しいところはどこだったかという質問には、英語で Thesis statement を書くこと(65.2%)が最も高かった。Thesis statement を書くのは探究というよりも、英語で論文を書くために、英作文の体裁を整えるための知識でしかないので、この項目が一番高いのは、探究そのものに生徒が最も力を注入している状態ではないことを意味しているのではないだろうか。自由記述のアンケート項目でも、英語で論文を書くこと自体に、「GL 課題研究」のほぼすべての時間を取られているという意見が多く見られた。

また、「GL 課題研究」と他の各教科・科目との関連性を聞いた項目では、60.9%の生徒が「特にない」と答えている。「あった」と答えた生徒に対して、どの教科とかわりがあったのかと尋ねたところ、65.2%の生徒が、「英語」と答え、続いて「現代社会システム」が47.8%と続いた。「現代文」や「情報」などは10%程度と低かった。学校行事や課外活動から、「GL 課題研究」のテーマを思いついたりかどうかを尋ねた項目では、ほとんどの行事や科目が、生徒の「GL 課題研究」のテーマ設定に影響を及ぼしていないことが分かった。唯一関連していたと挙げられたのは任意参加で行く海外・国内研修(40%)だった。調査結果から、総合的な探究の時間と、教科・課題活動の関連性は今の状態では非常に低いという状況が明らかになった。前述した通り、学校全体で前掲の表1のような関連性を意識しながら、カリキュラム計画を行う必要がある。

さらに、アンケートで、生徒たちは「GL 課題研究」の取り組みが大学での学びに役立つと思いつながらも、その負担の大きいと思っている生徒が、全体の82.6%に上ることが分かった。その負担の主な理由は、英語論文作成に時間がかかりすぎる(43.5%)であった。続いて、他の行事が忙しい(21.7%)、週に1回しか「GL 課題研究」の授業がないため(13%)という意見が上がった。生徒がどうしても「GL 課題研究」を他の行事や教科と切り離して考えてしまう傾向があるため、このような多忙感が生まれると考える。つまり、生徒た

ちは国際フォーラム・模擬国連・現代社会などで扱ったテーマを派生させて、「GL 課題研究」のテーマを設定しているのではなく、「GL 課題研究」テーマとして、全く違うものを思いつかなければいけないという状態になっている。自由記述では、「自分たちはアウトプットの練習をする前に、英語やディスカッションの授業や社会の授業でもっとインプットもするべき」という意見もあった。このようなことから、各教科で探究を意識した授業の改善を行い、生徒が自分の探究テーマを設定することができるような学校全体の連携が求められている。

学校設定科目「グローバル・イングリッシュ」の「アジアの栄養問題」は、探究的な要素を含んだ授業実践として行った。アンケートでは、授業を通して学んだこととして、「グローバルイシューには複雑な原因があることを理解できた」

(82.6%)、「アジアには2重負荷と呼ばれる深刻な栄養問題があること」(56.5%)、「複雑な問題の原因やつながりを探ること」(47.8%)が挙げられた。当実践に関しては、一定の成果があったと思われるので、今後はこのようなミニ探究の授業を多く行い、生徒が「なぜ〜か?」と自ら学びを深めることができるようなインプットの多い実践を多く行いたい。

課題研究論文を書きあげた高3の生徒のアンケートを見ると、「高2の段階でもっと探究を進めておきたかった」「時間が足りず、残念だった」という意見が多く見られた。課題研究論文を本格的に書き始める高2の3学期までにどこまで探究的に学習を進めておくかが、鍵になるだろう。

## 8. 成果と課題

本研究では、勤務校における総合的な探究の時間の抱える課題について、筆者なりに検討し、モデルカリキュラム案の提案、学校設定科目「グローバル・イングリッシュ」との横断的学習を促進する方法の提案、さらには、評価方法の提案などを行ってきた。一部はすでに実践をしているが、本研究で提案したすべての内容の実践を行い検証をしたわけではない。この点については、今後、実践を繰り返すなかで検証を行い、本研究の成果

をより精緻化していきたい。

さらに、今後は、本研究の成果に基づきながら、勤務校において、「GL 課題研究」を中心とし、コース全体でカリキュラムを考えていくことも重要であるとする。グローバル・リーダーの育成を目指すために、生徒にどのような資質能力を付けさせ、困難な社会を生き抜く力を身に付けさせなければならないか、議論を進める必要がある。

## 引用文献

石森広美 (2013) 『グローバル教育の授業設計とアセスメント』 学事出版

石森広美 (2015) 「国際理解教育と関連諸教育」、日本国際理解教育学会編『国際理解教育ハンドブック』 明石書店、pp. 106-111.

坂下絢子 (2020) 『GLOCOM ワークショップ デジタル・シティズンシップとは何か』 法政大学 [https://www.glocom.ac.jp/wp-content/uploads/2020/06/200619\\_SAKAMOTO\\_GLOCOMWS.pdf](https://www.glocom.ac.jp/wp-content/uploads/2020/06/200619_SAKAMOTO_GLOCOMWS.pdf) 2020年12月29日アクセス

田村学 (2018) 『深い学び』 東洋館出版社

森田真樹 (2015) 「国際理解教育と関連諸教育」、日本国際理解教育学会編『国際理解教育ハンドブック』 明石書店、pp. 16-23.

湯川笑子 (2020) 『私立H高校の英語教育改革実践2年目 --「英表文法」クラスから「英語表現」へ--』 京都大学地域連携教育研究 = Journal of Education and Research for Regional Alliances (2020), 5: p. 143

ASEAN, UNICEF, and WHO, with support from the EU/UNICEF Maternal and Young Child Nutrition Security Initiative in Asia (MYCNSIA) (2016) 『REGIONAL REPORT ON NUTRITION SECURITY IN ASEAN Volume 2』 United Nations Children's Fund UNICEF East Asia and Regional Office (EAPRO)

<https://www.asean.org/storage/2016/03/Regional-Report-on-Nutrition-Security-in-ASEAN-Volume-2.pdf> 2020年12月29日アクセス

（参考資料）

## 探究型英語学習 アジアの栄養問題 単元指導計画

## 1 単元名 Nutrition for Asian Children（独自教材）

## ○ 本単元について

本単元では、アジア地域の母子の栄養問題を通して、グローバルな課題の複雑性を認識し、具体例を説明できる（地球的課題）、世界の問題を身近な問題と結びつけて具体的に考えることができる（グローバル社会・相互依存）ことを目的とする。方法としては、英語科授業で培った技能・スキルである、音読やT/F questionsなどのさまざまな形式の英問英答を通して、何度も本文に触れさせることで内容を理解させる。内容を写真やグラフ（ビジュアル）を利用して、相手に正確にリテリングを行う。最終課題では探究した内容を基に自分の意見を述べるグループプレゼンを行う。

## 2 評価規準（英語＋探究）及び口頭発表ルーブリック

## ○ 単元の評価規準（英語）

コミュニケーションへの関心・意欲・態度 (A)	外国語表現の能力 (B)	外国語理解の能力 (C)	言語や文化についての知識・理解 (D)
相手に伝えよう、あるいは相手を理解しようとしている。	工夫して内容をパラフレーズし、正しくリテリングすることができる。	内容を理解し、英問英答の答えの根拠の文を探し出すことができる。	正しい語順や語法を用いて文章を構成する知識を身に付けている。

## ○ グローバルシティズンシップの評価基準（探究）※（石森、2013）より引用

コミュニケーション・協働 (E)	情報収集・活用 (F)
全体の中で自らの役割を認識し、他者と協力しながらタスクに取り組むことができる (16)	メディアや与えられた情報を冷静に分析する目を持っている。(20)

## ○ 口頭発表ルーブリック（国際理解教育ハンドブック P108 より授業者抜粋）

5 素晴らしい	【探究】生徒は探究した課題について明確に述べ、その重要性について裏付けとなる理由を提示。提示された結論を指示する具体的な情報が示される。 【発表】発表方法は人を説得する力があり、発表の構成も論理的である。視覚的な補助資料などを効果的に使用し、聞き手を引き付ける。
4 とても良い	【探究】生徒は探究した課題とその重要性を述べる。提示された結論を指示する適切な量の情報が示される。 【発表】発表方法にも工夫が見られ、発表の構成も適切である。視覚的な補助資料を用いている。
3 良い	【探究】生徒は探究した課題とその重要性、結論を述べるが、それを支持する情報や論理性は、4, 5ほど説得力のあるものではない。 【発表】発表方法や構成はほぼ適切である。視覚的な補助資料にも言及している。
2 努力を要する	【探究】生徒は探究した課題について述べるが、課題に応える結論は十分ではない。 【発表】発表内容や発表方法に対する工夫も不十分である。
1 不十分	【探究】生徒は設定した課題に対する探究を行わないまま、発表している 【発表】適切な結論が述べられず、発表内容も論点が不明瞭でわかりにくいものである。

出典：Wiggins(1988)及び西岡(2003)を参考に作成されたものを探究・発表の観点で抜粋したもの。

## 3. 単元指導計画 (全6時間)

時	該当箇所	指導内容・方法	評価ねらい
1	導入 【英語】	<p>Oral Introduction・日本語資料による背景理解 (UNICEF・WHO 報告)  <u>例文</u>を使って新出語彙・表現ペアワークで確認</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">           Stunting (発育障害) /Wasting (発育不良) /Overweight (肥満)            の原因と背景について         </div> <p>&lt;全体リーディング&gt;          ・読解シートで、T/F Question、Wh-Question を行う。根拠になる文を本文から探す問題等で、英問英答で内容理解を行う。          ・読解シートで本文の文法説明を行う。・音読シートで音読を行う。          ・語法やイディオム表現等の宿題を出す。  <u>リーディング予習課題</u>を提示</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">           Lifelong consequences of the double burden of malnutrition            (寿命の延長と栄養の二重負荷問題)            Causes of the double burden of malnutrition in Indonesia            (インドネシアにおける栄養の二重負荷の原因)         </div>	<p>外国語 (C)</p> <p>外国語 (D)</p>
2	リテリング練習 【英語】	<p>&lt;ペアリーディング&gt;※予習課題として読んできた内容を利用          ・リテリングワークシートを用いて、内容の要約を相手に伝える。          ・読解シートで、T/F Question、Wh-Question を行う。根拠になる文を本文から探す問題等で、英問英答で内容理解を行う。          ・読解シートで本文の文法説明を行う。・音読シートで音読を行う。          ・語法やイディオム表現等の宿題を出す。</p>	<p>外国語 (B)</p> <p>外国語 (A)</p> <p>外国語 (C)</p> <p>外国語 (D)</p>
3	グラフを読み解く 【探究】	<p>・宿題答え確認。本文のシャドウイング/Teacher's presentation          ・グラフの英語表現をワークシートで確認する。/          ・宿題としてグラフ教材を利用し内容をペアで言えるようになる。          (stunting/wasting/overweight の発現 ASEAN 諸国比較)</p>	<p>外国語 (D)</p> <p>情報 (F)</p>
4	最終課題 【探究】	<p>・宿題のグラフ教材のペア内発表          ・<u>最終課題グループワーク</u>の話し合いを日本語で行う (探究)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">           栄養失調の概念的枠組みの図を基に様々な方面から多角的・多面的に原因・関連性を探究し、英語でプレゼンを作る。  <b>【課題の設定→情報収集→整理分析→まとめ・発表】</b> </div>	<p>協働 (E)</p> <p>情報 (F)</p>
5	最終課題発表準備 【探究】 【英語】	<p>最終課題発表準備          ・追加資料 (衛生施設・塩分摂取量・食物適切性) を使用してよい。          ・まとめの部分ではアクション (行動指針) を発表してもよい。          グループでプレゼン台本を書いて提出する。</p>	<p>協働 (E)</p> <p>情報 (F)</p> <p>外国語 (D)</p> <p>外国語 (A)</p>
6	最終課題発表 【探究】 【英語】	<p>最終課題発表 ※口頭発表ルーブリックで評価する。          インドネシアの栄養問題についてグループ発表を行う。          プレゼン台本提出。Flipgrid で撮影して提出。          他グループの評価表・探究自己評価表提出</p>	<p>協働 (E)</p> <p>外国語 (B)</p> <p>外国語 (D)</p> <p>外国語 (A)</p>